

| | | |
|--|------------------------------|---|
| 平成22年度 シラバス | 学年・期間・区分 | 5年次・前期・B群 |
| | 対象学科・専攻 | 機械・電気電子・電子制御・情報・土木工学科 |
| 比較文化概論B (Comparative Culture B) | 担当教員 | 保坂直之 (Hosaka, Naoyuki) |
| | 教員室 | 図書館2階 (tel 42-9064) |
| | E-Mail | hosaka@kagoshima-ct.ac.jp |
| 教育形態 / 単位の種別 / 単位数 | 講義 / 学修単位[講義] / 1単位 | |
| 週あたりの学習時間と回数 | [授業(50分) + 自学自習(100分)] × 18回 | |
| <p>〔本科目の目標〕日本と欧州の文化を比較しながら、戦後欧州の社会と文化について学び、それによって異文化を理解するための方法・他者に自国文化を理解してもらおう感覚を養う。特に「B・欧州」では文化の構造的(全体的)理解に焦点をあわせている。映画やニュース映像などの資料も導入するが、「グローバル化による構造的変化は可能か」という問題設定がつねに授業の背景をなしている。</p> | | |
| <p>〔本科目の位置付け〕外国語の学習の目的は、本来言葉を知ることを通してその背後にある文化を学ぶことにある。本科目は通常の外国語授業では十分に時間が割けないこうした側面のみ集中して講義する。英語・ドイツ語等の基礎的知識があると理解がしやすい場合があるであろう。比較文化Aと並行して開講する。</p> | | |
| <p>〔学習上の留意点〕例えばドイツの学校の授業方法や雰囲気を理解するために、ディスカッションやグループワークを実施する場合もある。受身的な知識を得ることよりも、他国の人と中身のある話題で話し合えるようになることが、本来のこの科目の目的である。</p> | | |
| 〔授業の内容〕 | | |
| 授 業 項 目 | 時限数 | 授 業 項 目 に 対 す る 達 成 目 標 |
| 1 イントロダクション：多民族社会としての欧州 | 2 | 1 「多民族社会」という言葉で表わされる欧州の実情を理解できる。 2、3、4 日常生活や社会のありようについて、異文化としての欧州の文化を構造的に理解できる。 5 欧州の戦後史を生きた実例を通して理解できる。 |
| 2 異文化の構造的理解1：食文化 | 3 | |
| 3 異文化の構造的理解2：学校での授業とディスカッションの伝統 | 3 | |
| 4 異文化の構造的理解3：ドイツの政治と社会と弁論術 | 3 | |
| 5 欧州の戦後史と生活1：“Good-bye, Lenin!”での冷戦体制 | 6 | |
| < 中間試験 > | 1 | 1～5について理解の達成度を確認する。 |
| 6 欧州の戦後史と生活2：“Das Leben der Anderen”での冷戦体制 | 6 | 6 欧州の戦後史をさまざまな角度から理解できる。 7、8、9 自国の状況と比較しつつ、欧州の現代の文化や社会の問題を理解できる。 10 自国の将来の問題(労働市場の開放など)を欧州と比較しながらディスカッションできる。 |
| 7 日本と比較する：音楽・美術・モード | 3 | |
| 8 日本と比較する：労働市場の開放、社会福祉 | 4 | |
| 9 (補説)誤解としての俳句の翻訳 | 2 | |
| 10 まとめに代えて：自国を説明するための25の質問と回答 | 2 | |
| < 期末試験 > | 1 | 6～10について理解の達成度を確認する。 |
| < 答案返却・解説 > | | 各試験での教員からのフィードバックを元に理解と批評能力を深める。 |
| 〔教科書〕プリントで配布(資料や執筆したレポート等のファイリングをお願いする) | | |
| 〔参考書・補助教材〕読書案内等は随時授業中に行なう | | |
| 〔成績評価の基準〕定期試験(レポート試験、2回)80% + 宿題レポート(20%) | | |
| 〔本科(準学士課程)の学習教育目標との関連〕4-b | | |
| 〔教育プログラムの学習・教育目標との関連〕1-1, 4-3 | | |
| 〔JABEEとの関連〕(a)(f) | | |